

がんの教室

田中 伸哉

⑥

人間の体にてできる腫瘍には良性と悪性があり、がんは悪性腫瘍である。悪性は放っておくと大きくなり、手術しても再発することがあり命をおびやかす。それに対して良性とは取り除いてしまえば、再発もせず縁が切れるものだ。

例えば、がん検診で大腸にポリープが見つかったとする。大腸ポリープは、良性であれば腺腫、悪性であれば腺がんと呼ばれる。しかし腺腫と腺がんは、全く別ものではない。遺伝子の変異が蓄積されて、腺腫ができ、さらには腺がんとなる。

良性、悪性の見分け方

腫瘍の増殖スピードで判断

医学的には「腺腫・腺がんシークエンス」と呼ばれる。大腸ポリープでは、全体は腺腫だが一部ががんという場合も多い。大腸ポリープは、小さいと良性のことが多く、直径が2センチ以上では悪性の可能性が高まる。ではなぜ大きいとがんの可能性が高いのか。それは、ほかのがんにも言えることだが、悪性腫瘍は良性腫瘍に比べて増殖するスピードが速いためだ。

病理診断では一般的に「MIB1インデックス」という手法を使う。この診断法では、腫瘍の組織に特殊な抗体を触れさせる。すると、これから増えようとしている細胞だけが茶色くなる。この色の变化した細胞の個数を数えると、その割合で腫瘍の増殖する速さが分かるので、悪性が良性を結論付ける。警察がスピードガンを使ってスピード違反の暴走車を摘発するようなものだ。

それでも現代の医学には限界があり、良性か悪性が判別できない時がある。その場合は診断書には「悪性疑い」や「境界悪性」と記入される。法律でも医学でも「疑わしきは罰せず」だが、このような場合は注意深く経過観察することが重要なことは言うまでもない。

(北大医学部腫瘍病理学教授)

